2）しかし、広域に効果が発現することにより九十九里平野の源流が、この地域に集中的に発展することと思われる。又天然ガスの利用、東京への近接、工場経営に積極的であることなどを考えると、今後工業化がかなり進めると言われる。この地域の産業構造は近い将来に変ってゆくものと思われる。
3）地形的に、さして低平であって、平野内に砂淀と堤頂低地が海岸線にほぼ平行して交互に走っている。平野内でも観察地域中心とした地域では列状配列が最も顕著である。
4）地形と土地利用との非常に密接な関係にある、地形の差異がはっきりと土地利用上にあらわれている。即ち砂淀：畑地、平地表：集落、堤頂低地、谷底平地、水田に利用されている。
5）この地域の農業は、田と畑を兼営し、収穫方法は、田：水稲、毛作、畑：畑作として昔から古くから、甘藷、冬作として小麦、大麦（夏作、冬作各々の二名の割合は、年により収穫に変化が激しい）を栽培し、他に自給用として種々の作物を栽培している。この地域内にはほとんどの農家が画一的なこのような農業を行っているが、ここ数年来園芸作物の栽培が行なわれる様になったが、園芸作物を栽培する農家は1割弱にすぎない。この地域の農業の中心は米作にある。
6）東京に近接産の位置にあること、自然条件をめぐらされていること、両用水産業の進行、農業技術の進歩等によって農業が近年非常に変化している。農業の変化は、園芸作物の普及、省番化、機構化、兼業農家の増加、反当収量の増加、離村者の増加（兼業労働力の不足）、一農家の耕地の増加などの点に見られる。

那珂川下流南岸の地形と土地利用
——地方都市隣接地域の農業地理的考察——

渡辺正江

このテーマを探り組んだ数ヶ月の調査研究の結果のような、収穫のない時から不満という言葉は今回は見ることがなかった。調査の成果としては、自分ながらあわれみを胸に感じ得ない。しかしながらあくまであくまでと恩着用に一本のつながりを自らの絶を引き出すに似た感慨が、一つの報文を完成した後、いさずか発覚する私のなかに一つの慰めとなって残っている。

生業の消長不良をかき起こす力に終わらないか、命題の諸問題とか研究方法については早くから、先生方の御剛の示唆をいただき、更にその中に調
査の指針を見出し、要領を心得るのが当然であったが、実感としてそう考えたのは“何でもよいから”式にかなりの資料を集めから趣に気がつかれたのであった。又それらがいかに理論的なこととされているか、希望的視角の域を出るものではなく、 процедур雪のべき常ではなく、考察の基準的役割も豪然とないものとはしなければならないことを知らぬのち、あまり答えた様に思われる。当然のこととして理解したつもりでも大いに実用できなかったものである。

従来有機体として考えられている地域構造の諾事象の変わるとの検討や地域的命題の発見といった面を、現在自分が行なっている操作の全容であることを知ってはじめて幼稚ながら山岳学的見解の困難にしても誠然なことを頂った次第である。

取り扱ったテーマの領域は自分には限界なく広範に思えて業目を遂べるとは不可能に近いので、次に考察的に述べてみる。農業の発展的、地域の発展は、発展的可能性を残しているといつても過言ではないが推進されるか、地域説は河川下流の水田が占める地域であり、渕田、勝田両市をはじめとする地方市町村地区であるその条件が地域構造の基盤をなしていると考えられる。地域の傾向を極端化してみると、比較的、上層農業が多く実在が地元の農業開発、農業生産の向上に積極的であるものと新規労働力の他産業への吸収をはじめ、転業などによる農業化によっていわば農業開発、生産の向上に至踏みためのがのとその二つが把えられる。従前的にみて、農業の日進月歩の対象となっていますものを受覆できない。後者の傾向については農業家家60％という特異な農業構造を示す県全体と比較し、新規労働力の他県産出が着しくないという最近の県の傾向を考慮に入れても、位置の影響を受ける、つまり仮して在籍型の農外就業形態をとる性格をもつということは明らかである。

新興農業の構成には、県の方針により、その地方性を随分進め、小県の他県産への吸収という考え方に関して、藤田地域の発展についての構想をみる様に思われる。

藤田地域は低屋の河川下流域という “きまり文句” で地道に手がけているが、現在は自然防火の発展が着しく、このに従来的な自然、牛畜をはじめとする農業栽培が行われている。市に近接した広い自然防火帯に農業の農業栽培は比較的安定的であるが、石田の発展の農業産業の卓越する部分においては農業栽培の低さ性や、水田主体の農業体系からの規制を受けた市場価値、市場性の面で新興産地との競合にあいむしろ後退的である。
水田街道を通じて東京との自動車交通は活発化しているが漁業の出荷とは関係ない様である。一面の平場水田帯でもあり、労力労働率の面から、機械の導入をはじめ労働効率の高化が漁業集落に波及され漁港の地方利用、産業の導入など安定した漁業立地に移行する傾向が見られている。

そこで漁業発展に対する土地条件の利用性が今後どの程度まで積極的に利用されるかは予測しがたい。いまだ地域は東海岸からという形容に該当する水田帯であり、県全体の二毛作利用が早期栽培の普及と共に増加であるという点から、従来の漁業利用に対する考え方——変、ないし今作等では当地域においても二毛作化は余り考えられない。土地利用の変化についてはむしろ河川沿岸及び台地面の軽農土倉帯に於て、社会的要求に基づかれた普及の可能性の方が大であるようと推察される。現在はこの土地を“田方”と呼ばれる漁業発展に関して“野方”に対しComplexを持ち越して甘藻——長の単純な論理形式がとられている。

いずれにしても労力労働率の面で他産業との競合という社会的条件が様々の形で地域の漁業的利用の発展的動向を規定するであることは否めない。今後の動向についてはあくまで将来的の現実のみが答え得ることであり、私の推察可能な限ではないが権威されれたもので必要であると違う地域の地理的条件の変化を物語るものでもある。まさに生の現実に接して時局に即して物を考えることができたのは私にすぎた幸と云えるであろう。

巡 検 記
富岡巡検

4年（昭和34年度春生）

「武先生の巡検は大変よ、相当下調べしていかないと農家がさせらなければならない」と上級生から有難いご注意を受けていたのだが、皆武岡中の中継がぬけたせいで毎日ポータルに通してしまい、一、二の勉強家を除いてはその前日連研究室に現わる者がなく、多いに先生を嘆かせた私達ではあった。

それでも当日は持ちまわの大袋で11人が参加、それに先輩の鈴木さんが加わった。11時08分到着。駅前に接づけられた県のマイクロバスで先
(33)